

1763年度ベルリン・アカデミー懸賞課題に対する メンデルスゾーンとカントの回答

小谷 英生

群馬大学教育学部社会科講座
(2015年9月30日受理)

Berlin Academy Prize in 1763: Agreements and Disagreements between Mendelssohn and Kant

Hideo KOTANI

Department of Social Studies, Faculty of Education, Gunma University
(Accepted September 30th, 2015)

はじめに

本論文の目的は1763年度ベルリン・アカデミー懸賞課題に対するメンデルスゾーンとカントの回答を分析・比較し、同時代の問題関心を具体的に確認するとともに、彼らの回答がもつ哲学的・思想史的意義を明らかにすることである。そのさい、すでに先行する論文[小谷, 2015a, b]で獲得した知見に基づいて分析をすすめていきたい。その知見とは、1754年以降のドイツ思想史においては①旧来の(ライプニッツ＝ヴォルフ学派の影響下にあった)講壇哲学と新興の通俗哲学の対立があり、②前者は〈健全な理性〉に対する〈推論的理性〉の優位を、後者はその反対を主張していた、というものである。〈健全な理性〉とは直観的・直接的な把握・判断能力であり、コモンセンスの訳語として当時通用していた概念である。これに対し〈推論的理性〉とは原理(大前提)から媒介(小前提)を通じて間接的に物事を把握したり判断したりする能力を意味している。

これら①と②をフレームワークとして1763年のメンデルスゾーンとカントの議論を分析したとき、前者は〈推論的理性〉の哲学を、後者は限定的であれ通俗哲学ないしは〈健全な理性〉の哲学を擁護す

るような議論を展開したことが判明する¹。その具体的な内実を、以下の手順で論証していこう。まず、1763年度ベルリン・アカデミーの懸賞課題の内容と、この年の懸賞結果に対するこれまでの評価をごく簡単に確認する(第1節)。次にメンデルスゾーンの論文『形而上学における明証性について』(以下『明証性』)を詳細に分析し、メンデルスゾーンの議論を再構成する(第2・3節)。最後にカントの『自然神学と道徳の原則の判明性についての研究』(以下『判明性』)を分析・再構成し(第4・5節)、1760年代のドイツ哲学における問題関心の中心がどこにあったのかを見定めたい(結論)。

1. 1763年度ベルリン・アカデミーの懸賞課題

1761年5月28日のベルリン・アカデミー議事録によると、「哲学者たちは形而上学の真理の確実性に関する問いに同意し」[Registres de l'Academie, 1761]、それを1763年の懸賞課題とすることを決定した。その題目は『国家と学者の事柄に関するベルリン便り』1761年6月23日(第75号)において、次のように告知された。

「一般に形而上学的真理は、とりわけ自然神学と道徳の原則は幾何学的真理と同じくらい判明に証明できるのか。もしもそのような証明が不可能であるとすれば、何が形而上学的真理の確実性に固有の性質であるのか。どの程度の確実性が付与されることができなのか。そしてこの確実性の程度は、[真理の]完全な確信にとって十分であるのか」[AA 2, S. 493]。

この課題はいささか複雑なので、若干のパラフレーズを必要とする。まず注意しなければならないことは、ここで問題になっているのは形而上学と数学の証明方法そのものの異同ではない。それらの証明が同等の判明性および確実性をもたらすか否かが問われているのである(これを課題Aと呼ぼう)。そしてこの問いに対する答えがノーということであれば、形而上学的真理の確実性とどのようなものであるのか、何が真理の「完全な確信にとって十分であるのか」、こうしたことについてさらに考察することが求められている(これを課題Bと呼ぼう)。さらに、一般論だけでなく各論として、「自然神学と道徳の原則」がテーマとして与えられている(これは課題Cであるが、ただしこの課題については、今回は割愛する)。

こうしたアカデミーの諸課題に対し、メンデルスゾーンはAに対して然りと答えた。しかし数学と形而上学をまったく同じものとみなしたわけではないため、Bについても補足的に答えている(それが後にみる形而上学の「分かりやすさ」に関する議論である)。

他方カントの回答は、Aについては否であった。したがってカントの議論の中心は課題Bに関する考察にあり、カントはライプニッツ＝ヴォルフ学派のやり方を批判し、新しい方法によって形而上学の判明性を確保しようとしたのである。

さて、メンデルスゾーンがカントを僅差で破り第一等に輝いたことは周知の事実である²。この決着に対して、たとえばガイヤーが「ヴォルフ主義者が支配するアカデミーの選出により第一等に輝いたのはヴォルフ主義者モーゼス・メンデルスゾーンであっ

た」[Guyer, 2006, p. 25. 傍点引用者]と述べているように、ライプニッツ＝ヴォルフ学派からすればカントよりもメンデルスゾーンの回答の方がより望ましかったと言えるかもしれない。しかしそうであればなぜ両者が僅差であり、なぜアカデミーはメンデルスゾーンのみならずカントの論文も公刊したのか、その理由が判然としない。なにより課題の出題者はヒューム『人間本性論』独訳序文において、講壇哲学を批判しつつ、ドイツ哲学には長らく「有害な哲学的平和」が続いており、「多くの哲学者たちの武器は、長きにわたる平和によって鈍り錆びついでしまっている」[Sulzer, 1755, Vorrede]と主張したあのズルツァーであった。カントとメンデルスゾーンの論文が甲乙つけがたいものであったという事実は「ヴォルフ主義者の支配」という(それ自体が疑わしい)外的状況によっては片づけられないものである³。

それでは論文の内容についてはどうだったのだろうか。再びガイヤーの評価をみてみよう。

「アカデミーがメンデルスゾーンの洗練された試論に一等賞を与えたのはきわめて正しかった。というのも、カントのあまりよく書けていない論文は⁴、彼が20年後に詳述するであろう革新的な見解をただほんのわずかに暗示しているだけであったからである」[*ibid.*, p. 24]。

この引用によってガイヤーは、①「ただほんのわずかに」だけでも『判明性』が批判哲学につながる要素をもっていたこと、②カントはこうした要素を示せなかったために、メンデルスゾーンに敗れたことを示唆している。①についてガイヤーはさらなる説明を与えていないため、ここではさておこう⁵。②について言えば、批判期の見解とは異なることを理由として『判明性』の内容を劣ったものとみなすのは適切ではないだろう。批判期以前のカントの思想は劣っているという想定はナンセンスだからである。したがってガイヤーが『判明性』を正しく評価しているとは言いがたいだろう。

メンデルスゾーンとカントの論文を内容面からみ

たとき、着眼点や論理構成の点でひじょうによく似ていることに気がつく。彼らはともに、推論の出発点（定義命題、あるいは前提となる諸概念）の確実性と、数学と形而上学の記号（数式または言語）の差異に着目しているからである。そしてメンデルスゾーンが数学と哲学の方法的相似性を認めたのに対し、カントは数学と哲学の方法的差異を強調した。そして、それに伴いメンデルスゾーンはライプニッツ＝ヴォルフ流の哲学を擁護するような議論を、カントは通俗哲学を擁護するような議論をそれぞれ展開することとなる。どちらも同時代の思想水準からいえば、ありうる、そして然るべき回答であった。じつに 1763 年のベルリン・アカデミー懸賞論文をめぐっては、最終的にメンデルスゾーンが勝利したことの理由や経過よりも、メンデルスゾーンとカントの評価が僅差であったという事実の方ずっと重要なのである。二人とも優れていたという評価にこそ、この時期におけるドイツ哲学の問題関心が潜んでいるからである。

2. メンデルスゾーン『明証性』における数学論

繰り返しになるがアカデミーの課題は、形而上学の証明は幾何学（＝数学）のそれと同等の判明性に至ることができるのか、至ることができないとすれば形而上学的真理の確実性はどれほど信頼に値するのか、というものであった。『明証性』のメンデルスゾーンはこの最初の問いに然りと答えるが、それは幾何学と形而上学を同一視しているからではもちろんない。『形而上学における明証性について』というタイトルに含まれる「明証性 (Evidenz)」を、メンデルスゾーンは「確実性 (Gewißheit)」と「分かりやすさ (Faßlichkeit)」というふたつの要素に区分している⁶。そして形而上学は幾何学同様に確実であるが、しかし同様の「分かりやすさ」はもたないというのがメンデルスゾーンの結論であった。「あえて私は主張するが、形而上学の真理は幾何学の真理と同じ確実性をもつことが可能であるが、同じ分かりやすさをもつことはできないのである」[Mendelssohn,

1764, S. 6]。

メンデルスゾーンはアカデミーの課題に対し、このように留保つきで肯定的に答えている。しかし幾何学（数学）と形而上学（哲学）の差異とは何であるのか⁷。両者はなぜ同様の「確実性」をもち、同様の「分かりやすさ」をもたないのであろうか。メンデルスゾーンの議論を整理していこう。

2-1. 根本概念に含意された真理の展開、すなわち分析

メンデルスゾーンによれば数学は端緒において指定された根本概念を矛盾律と同一律によって展開する営みである。現代であれば公理公準からの展開とみなすところであるが、メンデルスゾーンは根本概念からの展開だと考える。彼自身は明確には論じていないが、根本概念は公理公準に先立つものであり、公理公準もそこから導出されるところの源泉だと考えられるからである。

根本概念とは幾何学の場合延長である。「幾何学は延長という抽象的概念以外の何も根底においてはおらず、この唯一の源泉から全ての帰結を導きだす」[*ibid.*, S. 7]。それだから「延長の概念のうちにあらゆる幾何学的真理が含意されている (eingewickelt werden) のが見出されなければならず、延長の概念のうちで幾何学はその真理を展開する (entwickeln) ことを教えるのである」[*ibid.*, S. 7]。このようにメンデルスゾーンにとって数学とは、根本概念に含意された事柄を展開する営みに他ならない。そしてこのような展開を、メンデルスゾーンは分析と呼ぶ。分析には次のような特徴づけがなされている。

「概念の分析は悟性にとって、拡大鏡が眼にとってそうであるのと同様の働きをする。拡大鏡は対象のうちに存在しないはずのものを映し出すことはない。概念の分析も同様である。分析はそれまで不鮮明で気づかれなかった概念の部分や要素を判明かつ認識可能にするが、概念のうちに存在しないものを概念のうちにもたらしことはしないのである」[*ibid.*, S. 8]。

幾何学的認識は分析的な認識である。それは延長という根本概念にすでに含意されている真理を展開し、この概念を「判明かつ認識可能」にするだけであり、延長概念に新しい要素を付け加えるものではないからである。しかも幾何学的真理が含意された真理の展開である以上、幾何学的真理は確実である。

「幾何学の確実性がまったき力をもつのは、それが概念と必然的に結びついているからである」[*ibid.*, S. 11]。言い換えれば、「幾何学的真理の確実性は[真理が]含意された概念と、そこから導出され展開された諸概念とが不変的に同一であるということ（*unveränderliche Identität*）にのみ基づいているのである」[*ibid.*, S. 17]。このように幾何学を延長概念に含意された真理の展開とみたところに、メンデルスゾーンの幾何学理解の特徴がある。

そして幾何学について言えることは数学一般についてもいえる。数学一般の根本概念は量であり、量概念に含意された諸真理の展開こそが数学一般の試みである。幾何学が図形を扱うかぎり延長は限られたものでしかないが、量ないし数一般を扱うとき、数学の対象は無限なものとなる。それだから数学は偉大な精神が長い時間をかけて真理を展開していく学となるのである [*ibid.*, S. 12] 。

2-2. 延長概念の生得性

かくして数学が根本概念の分析であり、この概念の含意の展開であるかぎり、数学はつねに正しいことになる。しかしながらもしもこの根本概念が恣意的に規定され前提されたものであったとすれば、そこから導出されたあらゆる幾何学的命題は恣意的なものとなってしまいかねない。そしてそうであれば、数学の諸真理は必然的で確実であると言えないのではないだろうか。

このような疑念を回避するために、メンデルスゾーンは根本概念を生得的かつ理性的なもののみならず、そうとしている。根本概念の生得性を主張するためにメンデルスゾーンが採用したのはプラトンの想起説であった [*ibid.*, S. 8-10] 。彼は『メノン』のソクラテスが無知の従者を導き、幾何学証明を達成させたという有名な逸話を肯定的に評価し、いわゆるタ

ブラ・ラサとしての魂という考え方を棄却する⁸。魂は最初から何らかの表象を伴ってこの世に生を受けるが、「そうした諸表象は[真理が]含意された概念という性質をもっているに違いない。その性質は、[……]魂のうちにつねに見出されうるが、魂によって気づかれることはないのである」[*ibid.*, S. 10] 。延長概念およびそこから展開された幾何学的命題が生得的だということは、それらが経験に依存しないことを意味している。また、延長概念が理性的であるというのは、それが感覚とは区別されていることを意味している。感覚において、あるいは現実存在する幾何学図形は、幾何学的命題の基礎ではない。言い換えれば、幾何学は感覚から抽象されたものではない。しかしそうだとすれば、経験に依存せず概念のみに基づいて成立する幾何学図形は、いかにして現実に（感覚において）存在する図形に合致しうるのである。延長概念と延長をもった現実的对象とのこの合致は、幾何学のみによっては不可能である。「数学の全領域においては、たんなる可能性の概念から対象の現実性へと推論しようと考えられている事例はまったく存在しない」[*ibid.*, S. 17] からである。したがって、

「私たちが何らかの幾何学的真理を応用しようとするやいなや、すなわち、私たちがたんなる可能性から現実性へと移行しようと欲するやいなや、あれこれの図形や数などが実際に存在することを言明する発見的命題が根底におかれなければならない、ということになる」[*ibid.*, S. 17. 傍点引用者] 。

延長概念および幾何学の諸命題はそれだけではまだ可能的なものにすぎず、現実性をもたない。現実性への移行が可能になるためには、「あれこれの図形や数などが実際に存在することを言明する発見的命題」が必要である。メンデルスゾーンによれば、このような「発見的命題」は感覚に基づく命題である。感覚は延長概念を基礎づけるのではなく、またそれと無関係というわけでもなくむしろその現実における対象を提示するのである。そして根本概念が感覚

を通じて現実的対象をもつことが分かれば、この概念から展開された帰結もまた、現実的対象をもつことになる。

「しかしひとが、あれこれの根本概念が現実に存在する対象をもっているという感覚による例証を信用し、拒絶不可能だとして受け入れることができるのであれば、この根本概念から導出された帰結も必然的に存在しなければならないことになる」[*ibid.*, S. 17 f.]。

かくして「感覚による例証」を媒介することによって、たとえば可能的な三角形に成り立つことは現実の三角形にも成り立つことになる。

ところが、ここでまたしても疑念が生じる。なるほど、想起説の疑わしさについてはさておき、それによって幾何学における可能的概念が恣意的ではないということが論証されたとしても、今度は感覚を通じた幾何学の現実性は疑わしいということになりはしないだろうか。その理由は、まさに感覚が信用ならないからである。

懐疑論者や観念論者から提出されるであろうこのような疑念に、メンデルスゾーンは現象概念の再検討によって答える。彼は現象を「可変的現象 (unbeständige Erscheinung)」と「不変的現象 (beständige Erscheinung)」に分類する。「可変的現象」とは色や味といったいわゆるセンス・データのことであり、「感覚の外に現実存在するものとは別のものとして知覚」[*ibid.*, S. 20]されたものである。「可変的現象」の諸性質はしたがって主観にのみ属し、客観には属さないものである。

これに対し「不変的現象はその根拠を人間の感官一般の内的性質のうちにもつ」[*ibid.*, S. 20]。「不変的現象」はなるほど感官を通じて与えられた表象であるが、しかし外的偶然性に左右されない性質をもつ。

「たとえ、懐疑論者が危惧するように、あらゆる感覚的な質がすべて感官の欺きであったとしても、その根拠は人間の感官の内的性質のうち

に見いだされねばならないだろう。つまり、私たちは感性的な事物をしかじかのように表象しそれ以外には表象しないが、その理由は私たちの感官がしかじかのような性質をもちそれ以外ではないからである。感官の欺きのこうした作用は、したがって不変的現象と名づけられるにふさわしい」[*ibid.*, S. 20]。

「不変的現象」は、現実的な事物が私たちに必然的に表象してくるあり方を規定している。そして懐疑論者が危惧するように、たとえそれが欺きであったとしても、私たちにとっては現実と呼ばれる世界を表象している。幾何学はこのような表象すなわち「不変的現象」に関わっており、それゆえ幾何学的真理は現実的事物につねに合致する。「したがって懐疑論者や観念論者の体系にあつてさえも、純粹理論的な数学のみならず実践的で応用的な数学 [=運動論など] もその価値を失うことはないし、否定できない確実性を保持し続けるのである」[*ibid.*, S. 20 f.]。

2-3. 小括

以上のようにメンデルスゾーンの『明証性』における数学論は、①幾何学であれば延長、数学一般では量という根本概念に含意された真理を展開するという方法に数学の「確実性」の根拠を見出すとともに、②根本概念の生得性を主張することによって端緒における恣意性という批判を排除し、③「不変的現象」を媒介とすることで現実への適用の確実性を確保する、という性格をもっていた。

このような見解の哲学史的背景は興味深い⁹、いまはさておこう。注目すべきは数学的（幾何学的）真理が私たちの現実的対象に適用可能だとしても、そのような現実性はあくまで現象界の現実性にすぎないとメンデルスゾーンが考えている点である。これは『純粹理性批判』におけるカントの議論に似ているが、安易に重ねてしまうことには注意が必要である（たとえばメンデルスゾーンは現象と物自体を区別しているわけではない）。とはいえ、数学的真理が現実的な真理であるためには理性と概念以外に感官と感覚が必要である、との認識にメンデルスゾー

ンが到達していたことは興味深い。彼の主張は非経験的概念から出発する無矛盾で確実な体系としての数学と、感官を通じてのみ与えられる私たちの経験世界という両者を統合する議論として理解できるからである。したがって、『判明性』がカントにいかなる影響を与えたのかは定かではないとはいえ、マクロな思想的観点からみて『純粹理性批判』へと至る一里塚であったと評価することは可能であるように思われる。

3. メンデルスゾーン『明証性』における形而上学論

3-1. 形而上学の「確実性」と「分かりやすさ」

さて、幾何学(数学)の「明証性」のうち、「確実性」については前項で述べた通りである。「明証性」のもうひとつの要素であった「分かりやすさ」については形而上学との対比において語られるため、続いて形而上学論に話を移そう。

数学と形而上学の違いは何か。さしあたりそれは対象の違いである。「数学は量(Quantitas)の学であり、哲学は一般に質(Qualitas)の学である」[*ibid.*, S. 21]。ただし質は感覚によっても把握可能であるため、「哲学は理性に基づく質の認識」[*ibid.*, S. 21]だとメンデルスゾーンは規定している。

しかし、たとえば色彩濃度や有徳さに度合いがあるように、質も量をもつ。したがって量と質の区別は「私たちの思考のうちに抽象を通じて生じているにすぎない」[*ibid.*, S. 22]。そしてこうした「抽象を通じた」純粋な量と質は、それぞれ数学と形而上学の純粋な部門において扱われる。「いかなる現実的な存在者を根底に置くことなく、量に関する概念がいかに関連しているのかを示すに留まる純粋理論的な数学があるように、あらゆる現実性をわきにおいたうえで事物の質に関する概念を展開し、その内的関連を洞察することを教える哲学の一部門があるにちがいないのである」[*ibid.*, S. 24]。この部門は「哲学の純粋思弁部門」[*ibid.*, S. 25]と呼ばれる。

さて、すでに述べたように、私たちの概念、とくに純粋思弁においては生得的であるような概念は、

真理を含意している。このことをメンデルスゾーンは繰り返し強調している。

「あらゆる私たちの概念は男性器の中の精子のようなもので¹⁰、見た目は悪いが多くの内的美徳を備えており、多くの美しさをその内奥に隠している」[*ibid.*, S. 24]。

したがって「あらゆる概念はそれ自体、無限の真理と結合しており、分析によって他の概念と真理へと解きほぐすことができる」[*ibid.*, S. 24]。つまり形而上学は数学同様、概念分析によって確実な真理の——ただし質に関する真理の——展開を行うことができるのである。そしてそうである以上、形而上学は数学と同等の「確実性」をもつことができる。

ところで、数学と形而上学の差異は量と質という対象の違いのみに存するのだろうか。そうではない、とメンデルスゾーンは考えている。真理を含意した根本概念の分析的展開を行う点で両者はたしかに同一であり、したがって同様の「確実性」を与える。しかし「分かりやすさ」が異なるのである。メンデルスゾーンは言う。「しかしこの学 [= 形而上学] の原則は、それほど分かりやすく講述されることはできない」[*ibid.*, S. 25]。その理由は、哲学が用いる言語の恣意性にある。

「哲学者の言語にあってはすべてがなおも恣意的である。語とその結合は思考の本性および結合に本質的に合致するようなものを何ももたらしてはくれない。したがって解明は無際限に積み上げられ、証明を含む詳細な哲学は一見すると無価値な言葉のがらくたの様子を呈するようになる」[*ibid.*, S. 25]。

哲学と数学の「分かりやすさ」の差異は、使用する言語の性質にある。哲学の言語は恣意的であり、数学の言語はそうではない。しかしもしもそうであれば、哲学は端緒において恣意的であり、「分かりやすさ」どころか「確実性」ももたないのではないかと疑いたくなる。しかしそれは誤解である。メンデル

スゾーンが言語の恣意性ということでは言いたかったのは、根本概念の規定ないし定義の恣意性ではないからである。上の引用で「語とその結合は思考の本性および結合に本質的に合致」しないと述べられていたように、哲学にあっては「思考の本性」すなわち理念と、この理念を表現する言語との対応が完全ではないことが問題なのである。

つまり哲学的言語の恣意性とは、理念と言語の間に必然的な対応関係がない状態を指している。そしてその理由は、形而上学の諸概念は日常生活の中でも用いられ、人々が各々勝手な意味を込めて理解してしまうことにある。

「哲学に用いられる主要概念は、人々が通常の生活の中でしばしば耳にしているものである。それゆえ人々は、この概念を十分熟知していると信じてしまう」[*ibid.*, S. 31]。

理念と言語の乖離は、数学には存在しない哲学独自の事情である。数学の記号は数学的真理を表現するために厳密かつ一義的に定義され運用される。したがって理念と言語のあいだにずれは生じない。数学の証明はそれゆえ、ひとたび記号が理解されてしまえば万人に一義的に理解されることが可能である。したがって数学と哲学は同等の「分かりやすさ」をもたないのである。

理念ないし概念と言語を分離するところに、メンデルスゾーンの形而上学論の特徴がある。概念の分析という点では哲学は「確実」であるが、この分析の表現においては十分な「分かりやすさ」をもたない。これがメンデルスゾーンの主張である。そしてこのような事情の中で、哲学者たちは自分の理解こそ正しいと考え、様々な哲学的主張を行うために、哲学はさらながら「無政府状態」[*ibid.*, S. 31] のようになってしまうのである。このような「無政府状態」を解消するために必要なのは、完全な言語による思考の表現ではない。むしろ、哲学的言語の不十分さを自覚し、そこから帰結される意見の多様性や対立を容認することである。そのために必要なのが「哲学の共和国 (die Republik der Weltweisheit)」

だとメンデルスゾーンは主張する。

「いかなる共和国にあっても矛盾の精神 (der Geist des Widerspruchs) は必然的帰結であるばかりでなく、しばしば自由と普遍的な福利の神聖な土台である。共和主義者は誰でも [……]、次のような自由を望む。すなわち、自分自身の意志を賢明な決定と称したり、同胞市民に無理強いしたりしていると誰にも思われることなく、どれほど荒唐無稽であれ万人が自らの意見を述べる自由を望む。このような性質は哲学的自由にも共有されている。すべての人が哲学の教説を吟味する能力をもたないにせよ、何らかの哲学的権威を承認し盲目的に [……] 追従するよりも、自らの乏しい洞察にしたがって判断する方がよい」[*ibid.*, S. 31 f.]。

「矛盾の精神」とは意見の対立を肯定する精神のことであり、万人が「自らの意見を述べる自由」を認めたことの「必然的帰結」である。私たちはすでに、エルネスティが広場 (アゴラ) における対話という古代ギリシャの哲学の伝統を復権しようとしたこと [小谷, 2015a]、そしてそれは 18 世紀ドイツにおいては「学者共和国」というかたちで実現されていたことを知っている。ここでメンデルスゾーンが表明している「哲学の共和国」も「学者共和国」と同義であり、彼はこれを肯定的に捉えているのである。

にもかかわらずメンデルスゾーンは通俗哲学者たちとは異なり、哲学的真理を言語とは別の場所に (すなわち私たちの魂の中に) 設定している。したがって彼にとって「哲学の共和国」とは真理が生成する場ではなかった。あくまでもそれは、哲学的言語が十分な「分かりやすさ」をもたないことの、そしてにもかかわらず自由な言語使用を容認したことの帰結にすぎない。とはいえ、完全な「分かりやすさ」をもちえないという欠点から「哲学の共和国」という積極的な理念を支持したことは、むしろメンデルスゾーンの優れた点であろう。コンセンサスに達する場としての言論空間ではなく、互いに対立する多様な意見がひしめきあうような言論空間を哲学者た

ちの世界として認めたこと、しかも相対主義に陥ることなくそれを認めたことは、現代における言論の自由を考える上でも興味深いアイディアであるように思われる。

3-2. 小括

メンデルスゾーンは二つの主張を行っていた。第一に、数学も形而上学も同等の「確実性」を有する。そして第二に、にもかかわらず両者の「分かりやすさ」は異なるというものであった。その理由は形而上学の用いる言語が自然言語であり——あるいは自然言語と共通であり——、したがってそれが本来伝えるべき思考（理念）を厳密かつ十全に伝えることができないからであった。

数学と哲学の根本的な差異を思考と言語（記号）の本質的合致の有無に見出したために、メンデルスゾーンは完璧な哲学的言語というものを原理的に認めない立場にたっている。このことは、メンデルスゾーンがライプニッツの普遍記号学の企てを拒絶したことを物語っている。メンデルスゾーンの議論はまた、なぜ形而上学の著作が数学と比べつねに不十分であり、曖昧さを排除できず僅かな「分かりやすさ」しかもたないのかを説明している。『明証性』『序文』において、形而上学の同時代的状況について次のように述べられている。

「私たちの世紀において、形而上学の第一根拠が絶対確実な証明によって数学の第一根拠と同様の不変的な基礎の上に据えられた¹¹。そしてこうした努力によってはじめて、[確実な形而上学の構築という]希望が抱かれるようになった。この希望がいかに大きいかをひとは知っている。ところが、[形而上学的著作の]成果が示しているのは、このことを作品へと仕上げるのがいかに難しいかである。それだから形而上学的概念を確実で論駁不可能なものと考えているひとでさえ、最後には次のことを白状せざるをえない。これまで形而上学の諸概念には数学的証明の明証性が与えられていることはなく、そうである以上多種多様な矛盾が発見されること

は不可避に違いない、と」[*ibid.*, S. 4 f.]。

形而上学には「多種多様な矛盾」が存在するが、それは形而上学の記号すなわち言語に由来する不可避の「矛盾」である。そしてそうである以上表面的な（「分かりやすさ」に関わる）「矛盾」であり、本質的な（「確実性」に関わる）矛盾ではない。したがってメンデルスゾーンは自らの論文を通じて哲学が信頼に値することを訴えたわけである。

メンデルスゾーンの議論は思考と言語を分離できるのかという根本的な問題を抱えてはいるものの、同時代の問題に対する回答としては非常に興味深いものである。[小谷, 2015a, b] で確認したように、講壇哲学的な形而上学に対する通俗哲学者たちの批判は、①恣意的な定義から推論のみによって展開された理論体系と、②〈健全な理性〉の軽視という点に向けられていたからである。メンデルスゾーンの議論はさしあたり①に対する再反論とみることが可能である。なぜならば彼は形而上学の根本概念は恣意的な定義によるものではない、そうみえるのはあくまで言語のせいであり、形而上学的思考そのもの問題ではないと主張しているからである。つまり形而上学が行う概念分析は言語分析ではなく、言語から区別された思考（理念）の分析であるとした点で、メンデルスゾーンは講壇哲学の批判者たちとは一線を画しているのである¹²。

4. カント『判明性』における数学と形而上学の判明性の差異

以上がベルリン・アカデミーに対するメンデルスゾーンの回答である。続いてカントの懸賞論文『判明性』の分析に移ろう。『判明性』は急ぎ足で書かれており、幾つかのテーゼは曖昧であり、説明不足である（この点ではメンデルスゾーンの方がはるかに優れている）。そこで可能なかぎりカントの真意を汲みとるように分析を進め、その論理を再構成するように努めていこう。

さて、アカデミー懸賞課題は三つあったが（先述の課題 A から C）、カントは提示された順序に即し

て議論を進めている。本節ではまず、課題 A（形而上学の証明は数学と同様の判明性をもちうるのか）について、カントがいかなる理由に基づいて否定的に回答したのかを確認したい。

4-1. 数学の定義は総合的であり、哲学のそれは分析的である

数学と形而上学の最初の差異は概念の定義の仕方にある。カントによれば一般概念の形成ないし定義にはふたつの方法があるという。すなわち「諸概念の任意の結合によるか、それとも分析によって判明になった認識から [一般概念を] 分離するか」[AA 2, S. 276] である。前者は総合、後者は分析と抽象と呼ばれる。

数学の定義は総合的である。

「数学の定義は最初のやり方 [= 諸概念の任意の結合] 以外ではなされない。たとえば同一平面にある任意の四本の直線を考え、向かい合う二辺を平行でないとするならば、この図形は不等辺四角形と呼ばれる。いま私が説明しているこの不等辺四角形という概念は定義以前には与えられないのであって、定義によってはじめて生まれる」[AA 2, S. 276]。

これに対し、哲学の定義は分析的である。

「哲学における定義の場合、事情は [数学とは] まったく別である。哲学の場合、ある事物の概念がすでに与えられている。しかしそれは混乱していたり十分に規定されていなかったりする。私はこの概念を分析し、分析によって分離された [一般概念の] 表徴を、所与の概念もろとも様々な場合において比較し、この抽象的思考を詳かにし規定されたものとしなければならない」[AA 2, S. 276]。

数学の概念は定義によってはじめて生じるが、哲学の場合そうではない。哲学においては定義以前に概念が与えられるからである。したがって哲学の場合

概念を定義するとは、すでに与えられた概念を分析し一般化し判明にすることである。

このような主張は、恣意的な定義から推論を行うライプニッツ＝ヴォルフ学派のやり方に対する批判を含意している。じっさい、「たとえば哲学者が理性能力をもったある実体を恣意的なやり方で考え、それを靈魂と名づけたとする。[……]ある言葉の意味をこのように規定することは、決して哲学的定義ではない」[AA 2, S. 277]とカントは述べ、ライプニッツのモナドを槍玉にあげている。カントによれば、モナドに関する諸定義はライプニッツによるただの発案であり、定義とはとうてい呼べないものだからである [AA 2, S. 277]。

哲学の諸概念が所与のものである以上、基礎概念の多くは最後まで明らかにならず、分析を中断せざるをえなかったり、そもそも分析できなかったりする。カントはたとえば「表象」という概念はほとんど分析できず、「空間」や「崇高」といった概念は部分的にしか分析できないと述べている [AA 2, S. 280]。数学の場合このような概念はひじょうに少ないが（「量一般、一、多、空間など」[AA 2, S. 279]）、哲学では多い¹³。また、数学の諸概念はけっきょくのところ総合的に定義すればよいために、基礎概念の分析が不十分であったとしても問題は生じない。たとえば空間とは何かが分からなくとも、「空間は三次元から構成される」と定義してしまえば、 x 軸・ y 軸・ z 軸を用いた解析幾何学は成立するからである。哲学にあってはそうはいかない。「哲学のすべての理説において、とりわけ形而上学において、可能な分析は欠かすことができない。なぜならば認識の判明性も確実な推論の可能性も分析 [の成功] にかかっているからである」[AA 2, S. 280]。

かくして、定義の仕方の差異から幾何学（数学）と形而上学（哲学）の判明性の違いが生じる。前者では概念の総合によって恣意的に定義することが可能であり、しかも対象はこの定義にしたがって初めて生まれてくるため、数学の証明はつねに判明で確実である。これに対して形而上学の場合、基礎概念は分析によってその内容を判明にしなければならない上、多くの概念の場合分析には限界がある。した

がって、形而上学の証明は一般的に幾何学と同等の判明性をもたないのである。これがカントがアカデミーの課題 A に否定的に回答した第一の理由である。

2-2. 数学の記号と形而上学の記号

次にカントは数学と哲学における思考と記号の関係を考察し、そこにも差異を見出している。まず、次のように言われる。

「問題解決、証明、推論において、数学は普遍的なものを記号のもとで具体的に考察し、哲学は抽象的に考察する」[AA 2, S. 278]。

たとえば図形の性質を証明する場合、その図形を具体的に描き、それに即して記号操作を行うことができる。具体例を挙げれば¹⁴、私たちは三平方の定理を $a^2+b^2=c^2$ という記号によって表記した上で a、b、c をそれぞれ具体的な直角三角形の三辺において考えることができる(その逆も可能である)。また数学の場合、たとえば x に関する方程式を解いている最中は x が何を指示しているのかを等閑視できるように、記号操作を行っているときには証明すべき命題をさしあたり無視することができる。

哲学の場合はそうではない。哲学においては、演算規則にしたがって記号操作を進めていけば最終的に論証が成立する、ということはない。したがって哲学の証明が真であるためには、つねに証明すべき事象そのものを念頭に置きながら記号を使用しなければならない。「哲学のような種類の認識において深く思考するときには、事象そのものをつねに眼前に据えておかねばならない」[AA 2, S. 279]。それゆえ哲学的論証においては精神的な集中が数学以上に求められ、難解さを避けることができない。これによって哲学は万人に対する判明性を減じることになるのである。

しかしより原理的な判明性の欠如は、哲学の記号そのものの性格に由来している。数学の場合思考過程はすなわち記号操作の過程であり、数学的思考と数学的記号はつねに合致している。ところが哲学に

あってはそうではないのである。

「哲学のやり方を数学と比較すれば、両者はまったく異なっている。哲学的考察の記号は諸々の語(Worte)以外では決してない。そして諸々の語は合成において、その[合成された]語(das Wort)が指示する全体的な観念を構成する部分概念を[十分に]¹⁵示すことはなく、またその結合において哲学的思惟の関係を[十分に]表示することはできないのである」[AA 2, S. 278 f.]。

ここでカントが述べていることは分りにくい、ようするに次のようなことである。カントは「合成」と「結合」を区別しているが、前者は複数の語によってひとつの語を規定(定義)する操作、後者は複数の語によって命題を構成する操作と考えてよいだろう。たとえば「いかなる物体も単純な実体から構成されている」[AA 2, S. 279]という命題を取り上げてみよう。まず「物体」という主語概念は「単純」「実体」「構成」などといった諸概念の「合成」とみることができ、またこの命題そのものはこれらの概念の「結合」とみることができ、この命題はしかし、「物体」という概念の内容を余すところなく規定しているわけではない。「物体」概念にはさらに、不可入性や延長といった概念も属するからである。したがって「いかなる物体も単純な実体から構成されている」という命題は、たとえそれが「物体」の本質を言い当てているとしても、「物体」の観念に含まれるすべての要素を汲みつくしているわけではないのである。これが、「諸々の語は合成において、その[合成された]語が指示する全体的な観念を構成する部分概念を[十分に]示すことはな」という文言の意味である¹⁶。

そして哲学の記号すなわち語は多義的であるため[Vgl: AA 2, S. 284]、「物体」「単純」「実体」「構成」といった概念は数学の記号のように一義的に規定されているわけではない。それゆえ「いかなる物体も単純な実体から構成されている」という命題は、数学の命題ほど意味が定まっているわけではない。

「語」が多義的であり十全に規定されえない以上、哲学的命題には誤解される可能性や多様な解釈を許す余地がたねに存在するわけである。それゆえ哲学者は、万人が一樣に理解可能なかたちで自身の思考を表現し伝えることはできないのである。これが哲学の記号すなわち語は「その結合において哲学的思惟の関係を表示することはできない」という文言の意味である。

かくして、哲学的思惟とそれを表現するための言語の間には不一致があり、したがって形而上学は数学と同等の判明性を獲得することはできない。これが、アカデミーの課題 A にカントが否定的に回答した第二の理由である。

5. カント『判明性』における〈健全な理性〉の位置

5-1. 「上級哲学」の任務

以上をふまえて、カントはアカデミーの課題 B に移る。もう一度繰り返せば、それは形而上学的真理の確実性に固有な性格とは何か、形而上学的真理は「完全な確信にとって十分であるのか」といった問いであった。

この問いにカントは然りと答えるが、その理由は前節の議論ですでにほとんど与えられていた。すなわち、「概念を分析し、分析によって分離された[一般概念の]表徴を、所与の概念もろとも様々な場合において比較し、この抽象的思考を詳かにし規定されたものと」とするという操作を通じて、形而上学的真理は確実なものとして定立されうるというのがそれである。

こうした分析の結果生じた真理ないし基礎的な諸命題は、一覧表のかたちで整理されることが望ましい。そしてそれこそがまさに哲学の課題であるとカントは述べる。

「哲学という学問において私ができれば見てみたいのは、証明こそできないものの、哲学の全体を貫き、その根底に存在する諸命題が記載された一覧表である。たしかにこの一覧表は途方

もない計画になるであろう。しかしながら、こうした証明できない根本真理の探究こそ、上級哲学 (die höhere Philosophie) のもっとも重要な仕事であり、そうした類の認識が拡大するかぎりは根本真理の発見を終わらせることはできないだろう。というのは、対象が何であれ、悟性が対象において最初にそして直接的に知覚する諸表徴 (Merkmale) は、やはり多くの証明できない諸命題[……]の与件だからである」[AA 2, S. 281]。

カントはここで百科全書を想定しているように思われるが、いまはさておこう。「上級哲学」は証明できない基礎命題を発見し、それを一覧表にすることを目的とする。そのさいこうした基礎命題を構成する「与件」は、「悟性が対象において最初にそして直接的に知覚する諸表徴」[傍点引用者]である。概念分析の分析は、こうした「諸表徴」の発見・確定から始められなければならない。すなわち、たとえば空間を定義しようとするならば、「この概念が与えられているのだから、まず私は最初にそして直接的にこの概念のうちで考えられている諸表徴を分析によって探し出さなければならない」[AA 2, S. 281] わけである。そしてこうした空間の「諸表徴」には、たとえば〈三次元をもつこと〉などが該当するだろう。「最初にそして直接的に」把握される「諸表徴」から推論を始めることが、形而上学にとって重要である。したがって数学は定義から始めるが、哲学はそうではないとカントは述べる。

「これらすべてのことからごく自然に、それにしたがえば可能なかぎり最高の確実性を達成しようであろう方法に関する規則が帰結する。この規則はこれまでひとが従ってきたものとはまったく異なっており、もしもこの規則を適用すれば、別のやり方ではけっして期待されえなかつたほど素晴らしい結果を約束してくれる。第一の、そしてもっとも重要な規則は、ひとは定義から始めるべきではない、というものである [……]」[AA 2, S. 285]。

この引用についてとくに説明は不要であろうが、このカントの「規則」が既存の形而上学に対する新しい方法として提示されていたことは、確認しておく必要があるだろう。続けて、カントは次のように述べる。

「[形而上学の新しい方法にあつては]むしろ最初にひとは対象に関して、たとえその定義に先立つとしても、直接的に確実なものを注意深く対象の中に探し求める。そこから帰結を引き出し、対象についての真でありかつ十分に確実な判断を探し出す。[……]第二の規則は次のようなものである。すなわち、対象のうちに最初に確実に見出されるものを考慮しつつ、対象についての直接的な諸判断を特別に際立たせ、[その諸判断のうちの]ある判断が他の判断に含まれていないことを確かめた後で、幾何学における公準のように、その判断をあらゆる推論のための基礎としてまず記載するべきである」[AA 2, S. 285]。

この引用では「直接的に確実なものを注意深く対象の中に探し求め」、「対象のうちに最初に確実に見出されるものを考慮」することが述べられており、それらが「あらゆる推論の基礎」になるべきことが主張されている。哲学の記号や推論の出発点をめぐる以上の議論は、メンデルスゾーンと酷似している。しかし「最初にそして直接的に」知覚ないし思考された経験的概念を「推論の基礎」とすべきであるとした点で、『判明性』のカントは生得的な根本概念を出発点としたメンデルスゾーンと袂を分かつのである。

5-2. 〈健全な理性〉へのコミットメント

カントが強調した「直接的」な把握は、[小谷, 2015b]で示したように、〈推論的理性〉に対する〈健全な理性〉能力の特徴でもある。〈健全な理性〉=コモンセンスは直観的・直接的把握能力を意味していたからである。そして〈健全な理性〉を重視する立場(=通俗哲学)からみれば、それを無視し、〈推論

的理性〉のみで哲学を構築しようとする哲学(=講壇哲学)は批判の対象となる。

じっさいカントも、数学を真似て「冒頭でただちに定義し、自信たっぷりにそこから推論する」[AA 2, S. 289]のような(言うまでもなく講壇哲学的な)やり方を批判した後で、次のように述べている。

「それに対して、哲学者が健全な理性の自然な道を行くならばどうであろうか。すなわち、すぐに定義を要求するのではなく、対象に関する(たとえば空間・時間の)抽象的な概念について確実に知っていることを探し出すならば、どうであろうか。もしも哲学者がこうした確実な与件から推論するならば[……]どうであろうか。そのとき哲学者は[……]真に価値あるものを提供するような存在におそらくなるであろう」[AA 2, S. 289. 傍点引用者]。

このようにカント自身もまた、「最初にそして直接的に」把握された事柄から出発するような推論を「健全な理性の自然な道」と呼んでいる。『判明性』のカントは〈推論的理性〉の哲学すなわち講壇哲学を批判し、この引用によってはっきりと、〈健全な理性〉によって把握される与件を端緒におき、そこから推論を始めることを、つまり〈推論的理性〉に対する〈健全な理性〉の優位を主張している。

さて、〈健全な理性〉によって把握される「諸表徴」は経験的である。しかし経験的であるからといって、「確実」でないわけではない。カントはニュートンを引き合いに出しつつ、次のように主張している。

「形而上学の真の方法は、ニュートンが自然科学において導入した[……]方法と同一のものである。すなわち、そこで言われているように[自然科学にあつては]確実な経験の中に、場合によっては幾何学の助けを借りながら、自然の確実な現象を生じさせる規則を探し出すべきなのである。[……]形而上学においても同様のことが言える。確実な内的経験によって、つまりは直接的に明白な意識によって、何らかの普

遍的性質に関する概念のうちに確実に存在する諸表徴を探し求めよ」[AA 2, S. 286]。

「確実な内的経験」とは、空間・時間・崇高・自由などといった所与の諸概念に含まれる、〈健全な理性〉によって直接把握された「諸表徴」のことを意味しているとみてよい。そしてそこから出発することによって、「そのとき哲学者は[……]真に価値あるものを提供するような存在におそらくなる」のである。

形而上学は数学ほどの判明性を得ることはできないが、しかしそれでも形而上学的真理は確信に値するほどの判明性を手に入れることはできる。それは「健全な理性の自然的な道を行く」場合であり、「哲学者がこうした確実な与件から推論する」場合である。以上のような理由から、『判明性』のカントは〈健全な理性〉を方法的観点から高く評価したのである。

結 論

論文執筆当時、カントもメンデルスゾーンも互いの議論を知らなかったが、にもかかわらず両者の問題構成はよく似ていた。どちらも哲学における思考と言語の関係をめぐって議論を組み立てているからである。そして両者の議論は究極的に、哲学の、ないしは哲学的推論の確実な出発点をどうやって設定すべきかという問題をその本質としている。そしてこの問題こそ、同時代の哲学的対立の中心にあったものなのである。ドイツ通俗哲学の回答は、カントも主張したように〈健全な理性〉による直接的把握であった。ライプニッツ＝ヴォルフ学派からのひとつの回答は、メンデルスゾーンが魂の想起説を援用しながら主張したように、生得観念であっただろう。そしてどちらの選択も 1763 年前後にあってはアクチュアルなものであった。1762 年にバウムガルテンが死去し、その前年に若き天才的通俗哲学者トマス・アプトが『祖国のために死ぬこと』によって論壇をにぎわしていた時代である。ライプニッツ＝ヴォルフ学派とドイツ通俗哲学は新旧の世代間対立

でもあり、このことは 1760 年代前半には誰の目にも明らかになりつつあったからである。

したがってズルツァーが仕掛けた 1763 年度のベルリン・アカデミー懸賞課題は、1754 年から動き出した通俗哲学というムーブメントが進行し [小谷, 2015a]、講壇哲学と通俗哲学の対立が時代の最も大きな哲学的テーマであることを印象づけるものであっただろう。そしてメンデルスゾーンとカントという二人の思想家がそれぞれの立場を代表するような議論を展開したことは、このような印象が世間に広まっていくひとつのきっかけであったことは想像に難くない（実に両者はこの論文によって一躍有名人となった）。この意味では、もはや本論文では詳述しないが、1765 年にライプニッツの『人間知性新論』が公刊されたこともまた、まさに時宜にかなっていたと言えよう。というのもそこではライプニッツとロックの対決が、生得観念説と経験主義の対立として描き出されていたからである。

もちろんカントは 1760 年代後半には通俗哲学を離反し、理性批判へと歩を進めていく。そのさいにかつての自分の立場が捨て去られてしまったことは事実である。しかし『純粹理性批判』におけるひとつの重要なポイントは、可能的経験の領域を踏み越えたとき、推論は仮象に陥るというものであった。これは〈健全な理性〉による「直接的」な把握を「推論の基礎」に置かねばならないとした『判明性』の立場と平行なものである。もちろん、〈健全な理性〉による経験的把握と『純粹理性批判』における（感性と悟性のアプリアリナ使用に基づく）可能的経験との間には、なおも大きな隔たりがある。それでも前者は後者へと至るために必要な立場であった、と推察することは可能である。つまり、純粋な定義と推論のみで哲学的思惟を推し進めるライプニッツ＝ヴォルフ学派の方法から批判哲学へと至る道のりで、カントが通俗哲学を経由したことには哲学的な意味があった、と考えることは十分可能なのである。そのさい興味深いのは、1763 年に競い合ったメンデルスゾーンの『判明性』に〈根本概念の不変的現象への適用によって幾何学的対象が成立する〉というアイディアが存在したことである。これ

が後のカントに影響を与えなかったと考えることは不自然だろう。

いずれにせよ、本論文の結論をもう一度繰り返せば、1760年代のドイツ哲学における問題関心の中心は推論の確実な出発点をめぐる問いにあり、メンデ

ルスゾーンとカントはそれぞれライプニッツ＝ヴォルフ学派とドイツ通俗哲学を代表する回答を提示した。そして同時代人の目には、両者は甲乙つけがたく優れていると映ったのである。

注

- 1 通俗哲学が〈健全な理性〉の哲学であることについても [小谷, 2015 b] を参照のこと。なお通俗哲学に対するカントのコミットメントは限定的であり、たとえば神の現存在証明は〈健全な理性〉によっては不可能だとしていた [Vgl: AA 2, S. 65]。カントはすべての哲学的問題を〈健全な理性〉に基づいて解決しようと考えていたわけではない。
- 2 [Registres de l'Academie, 1763] によると、論文番号 20 番と 28 番が競っており、20 番(メンデルスゾーン)に軍配が上がったものの 28 番(カント)もそれに劣らないとされている。フォアレンダーはこの事情を次のように整理している。「クラウス [=カントの弟子、後にケーニヒスベルク大学の同僚] の報告によれば、アカデミーが第一等をメンデルスゾーンに授与したのはただ『激励のため』だけであって、カントが第一等に輝くはずであったという。このことをズルツァーはカント自身に手紙で報告すべきであった」 [Vorländer, 1924, S. 155]。クラウスのこの報告の(そしてフォアレンダーの記述の)信憑性については定かではない。しかしいずれにせよ、フォアレンダーはメンデルスゾーンを不当に貶めている(そしてカントを過大評価している)。本論文で検証するようにメンデルスゾーンの『明証性』はきわめて質の高い論文だからである。
- 3 ふたたび [Registres de l'Academie, 1763] によれば、当選論文決定会議の出席者は J・P・ハイニウスをトップとしてメリアン、アーチャード、ズルツァー、ベグレンなどであり、フランス人やフランス系ドイツ人も混ざっている。彼ら哲学的立場については不明であるが、このような顔ぶれをみると、「ヴォルフ学派の支配」という状況があったのかどうかは検討の余地がある。
- 4 この表現はかなり急いで論文を仕上げたというカント自身の吐露 [AA 10, S. 41] をふまえたものであろう。したがって「あまりよく書けていない」というのは内容の核心にかかわるものではなく、主に文章に関する指摘である。
- 5 たとえば石川文康は、『判明性』で提案された根本概念の一覧表という発想が、『純粹理性批判』のカテゴリー表につながっていると主張している [石川, 1997, 208 頁]。
- 6 「真理の明証性には、確実性の他になおも分かりやすさが属している。分かりやすさとはすなわち、証明を一度理解したならば同時にその真理が完全に確信され、万人が満足

するに違いないという性質であり、その真理を受け入れるのに矛盾を感じるのがまったくない、という性質である」 [Mendelssohn, 1764, S. 5]。

- 7 『明証性』のメンデルスゾーンは「形而上学」と「哲学 (Weltweisheit)」をそれほど厳密に区別せずに用いている。
- 8 ここでメンデルスゾーンが念頭においているのは、アリストテレス『靈魂論』第 3 卷第 4 章 (429b30-430a1) である。アリストテレスは言う。「先に説明されたところによると、理性は可能的には或る意味で思惟されるものであるが、しかしそれが思惟するにいたるまでは、現実的にはそれらの何ものでもない。そして理性が可能にそうであるのは、ちょうど現実的には何もそこに書きこまれていない書板のうちに文字があるようなものである。まさにこのことが理性において起こるのである」 [アリストテレス, [年代不詳] 1968, 101 頁, 傍点引用者]。メンデルスゾーン自身は次のように述べる。「それゆえこの世の生に入るに際して、魂は決してアリストテレス主義者が望んだように滑らかな板 (eine glatte Tafel [=タブラ・ラサ]) と比較されるべきではない」 [ibid., S. 10]。タブラ・ラサでまさきに想起されるのはロックであるが、ここでメンデルスゾーンがロック批判を行っているかどうかは定かではない。
- 9 たとえばメンデルスゾーンの議論はライプニッツが『人間知性新論』第 1 章で展開した生得観念の議論に近いが、繰り返すように同書が出版されたのは 1765 年である。メンデルスゾーンの立場はロックに近いようにも見受けられるが、果たして彼のオリジナルなものだったのか、それとも先駆者がいるのかは定かではない。
- 10 この表現はラテン語の *conceptus* が「胚」を意味することを踏まえているように思われる。もしかしたらユダヤ思想との関連もあるかもしれないが、それについては定かではない。
- 11 この「第一根拠」が何であり、誰のどのような証明が「絶対確実」なのかについては、メンデルスゾーンは残念ながら何も語っていない。
- 12 ただし、晩年のメンデルスゾーンは〈健全な理性〉を重視する立場に移ったようである。私たちは残念ながらテキストを確認できなかったが、これについてカントは『思考の方向を定めることについて』(1788)において不満を表明している [AA 8, S. 133 f.]。

- 13 「ただちに予想されるように分析において、概念自身のせいであつたり私たちのせいであつたりするが、[それ以上]分析できない概念に行き着くことは[多くの場合]避けられない。これほど多くの多様性についての普遍的認識が少数の基礎概念からのみ成立しているなどということはありえないため、このような概念はひじょうに多く存在するように思われる」[AA 2, S. 280]。
- 14 以下の本論で用いられる例は基本的に私たちが与えたものであり、カントのテキストからではない。カントからの引用である場合には、それが分かるよう明記した。
- 15 引用文で示したように、「十分に」を補って読む必要がある。というのも、ある概念 A が B、C から合成されたとき、B と C が A の部分概念を示さないというのは不適切だからである。本文でも採用した命題「物体は単純な実体から構成されている」の場合、「単純な実体」は「物体」の部分概念ではない、とは言えないだろう。
- あくまでカントが指摘しているのは、数学の場合 $A=B$ は A と B が等価であることを表すが (例: $3+2=5$)、「A は B である」の繫辞「である」は A と B が等価であることを示さない、ということである (例: 〈椅子は道具である〉は〈道具は椅子である〉を意味しない)。したがって「A は B である」という命題において、B は A の部分概念であるとしても、A という概念の部分概念をすべて汲みつくしているわけではない。それゆえいま問題になっている引用文では「十分に」を補う必要があるのである。
- 16 これに対して、たとえば「直線とは二点間を最短距離で結んだ線である」のような数学の定義の場合、「直線」はそれ以上の含意をもたず、したがって十全に規定されていると言えるだろう。

文献

- カントからの引用についてはアカデミー版を用い (AA と略記)、巻数と頁数を表記した。
- Guyer, Paul, *Kant*. 2nd edition, Routledge, 2006.
- Kant, Immanuel, Königlich Preußische Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), *Kants Gesammelte Schriften*, Bd. 1-29, Berlin 1900ff.
- Mendelssohn, Moses, *Abhandlung über die Evidenz in Metaphysischen Wissenschaften*, Berlin, 1764.
- Registres de l'Academie, *Protokoll des 28. Mai, 1761, Protokoll des 26. Mai*, 1763.
<http://akademieregistres.bbaw.de/exist/apps/SadeRegistres/index.html>.
- Sulzer, Johann Georg [Anonym], *Vorrede*. In: Ders. (Hrsg.), Hume, *Philosophische Versuche über die menschliche Erkenntniß*. Hamburg u. Leipzig, 1755.
- Vorländer, Karl, *Immanuel Kant, der Mann und das Werk*. Leipzig, 1924.
- アリストテレス (山本光雄訳), 『靈魂論』, 『アリストテレス全集』第6巻, 岩波書店, 1968, 1-121頁。
- 石川文康, 『『自然神学と道徳の原則の判明性』(『判明性』)], 有福考岳・坂部恵他編, 『カント辞典』, 弘文堂, 1997, 207-208頁。
- 小谷英生, 「哲学的プロジェクトとしてのドイツ通俗哲学: エルネスティ「通俗的な哲学についての序説」」, 『一橋大学社会科学古典資料センター年報』35, 2015a, 3-16頁。
- , 「十八世紀ドイツにおける二つの理性——〈健全な理性〉と〈推論的理性〉の区別とその優劣をめぐって——」, 『唯物論研究年誌』20, 2015b, 213-235頁。
- ライプニッツ, ゴットフリート・ヴィルヘルム, (米山優訳), 『人間知性新論』, みすず書房, 1987。